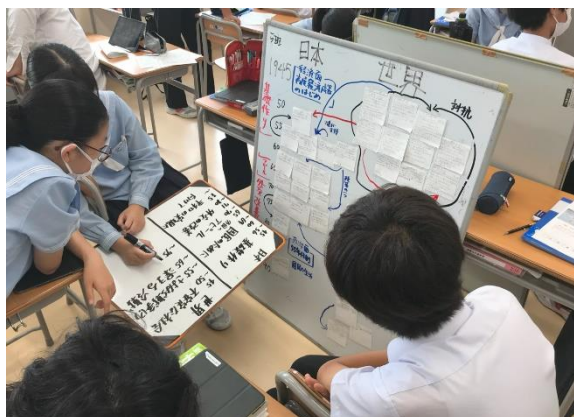


多様な視点で事象を見つめ、主題を解明していく学びを構築する

－戦後の時代を大観し、未来社会を創り上げていくための資質・能力を培う授業（第9学年）－



授業者 森 川 禎 彦

「壊滅的な終戦直後の状況から、日本はどのように立ち直っていったのだろうか?」「もはや戦後ではない」という言葉から「いつ『戦後』は終わったのか?」について、戦後の社会的事象を多様な視点から協働で探っていく。戦後の発展の過程を調査し、事象同士を関連付けながら大観していくことを通して、今後の未来社会を創り上げていくための資質・能力を培っていく授業。

1. 学びの構想

戦後について学ぶことの意義

本実践は、歴史的分野の最終単元であり、第二次世界大戦後から現代までを扱う。ポツダム宣言の受諾後、日本はGHQの占領下の中で、民主化と非軍事化を基本とする新たな国づくりを進めた。そして、サンフランシスコ平和条約締結で独立を回復してからは、特需景気や高度経済成長を経て世界的な経済大国へと発展を遂げ今日に至る。しかし、戦後78年を経ても、沖縄の米軍基地の問題、近隣各国との領土問題など戦争の爪痕の残る諸問題は今だに解決されていない。

このように本実践は、自分たちの生きている時代に直結する内容である。普段耳にするニュースの要因を探っていくと、本実践の内容と密接に関係するものも多い。例えば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、未だに解決の糸口さえ見えないが、そもそもの要因は、冷戦やソ連の解体に端を発するものである。このような諸問題の解決に向けて、戦後どのように日本や世界が歩んできたのかを学ぶことは重要な意味を持つ。

そのために、多様な視点で事象を見つめ、解釈したり、価値づけしたりしながら、判断をしていく資質・能力を培う必要がある。

本校社会科では、7年間で目指す人物像として「社会に生きる『市民』として、よりよい未来を創り上げようとする人」を掲げており、本実践はまさにそのための中心となるものであると考える。

多様な視点で戦後を大観する

壊滅的な被害を受けた終戦から約10年で「もはや戦後ではない」と経済白書(1956年)に明記され、日本の戦後は新たなステージへと変わっていったという認識がある。しかし、経済的な側面のみで、「戦後は終わった」というのは一義的で

はないだろうか。そこで本実践では、子どもたちと共に、経済的な側面だけでなく、あらゆる視点から「いつ『戦後』は終わったのか」について考えていく。多様な視点から社会的事象を調査、検証していくことで、戦後の日本が世界の出来事など様々な要因によって築かれていったことを理解できる。

また、「いつ『戦後』は終わったのか」については、何を根拠に考えていくかがより重要である。その価値判断の根拠を明確にしていくために、事象同士を関連付けながら考えていく。そうすることで、単なる出来事の羅列に留まらない戦後の歩みというストーリーが見えてくる。

自ら語れる学びを目指して

「いつ『戦後』は終わったのか」という価値判断をしていくために、一人一人の考えをグループの中で練り上げ、クラス全体で議論し、個の学びを再構築していく。このような学びを往還していくことで、社会的事象を見つめる新たな視点を獲得していく。グループやクラスでの議論においては、無理に1つの意見に集約するような合意形成をしないことで、多様な視点をもとに個の学びの変容を感じられるコミュニティを目指していった。その学びの変容を「振り返りシート」で書き残していくことで、本実践を通して、子どもたちが自らの学びの価値を語れるようにしていった。単元を通しての自らの学びの変容と深まりを語れるようになることが、自律的な学びへとつながっていくと考える。

2. 学びのストーリー

(1) 戦後直後の日本をネーミングする

(第1時)

前単元では、「軍事力以外の平和的な解決への道はなかったのか」という主題で世界恐慌から終戦までの日本について探究し、二度と戦争をしないために日本や世界、そして私たちがこれから何をすべきについて考えてきた。

優理は、単元の最終レポートで自らの決意を次のように綴っている。

単元の最初で戦争の被害について知った時には、「可哀そう」「悲惨だ」などあたかも自分には関係ないような他人事として捉えていました。でも、実際に戦争がどのような原因から起きて、その背景は何かなどを調べ、「戦争を避けることは出来なかったのか？」についてみんなで考えていくうちに、この戦争がもたらしたものを自分事として捉え、後世に伝えていかなければならないと思うようになりました。また、国と国との間で争いが起きたとき、それを武力で解決しようとするのではなく言葉で解決する、そんな考えを世界中の人々が持っていくと良いと思います。そして、二度と戦争をしないためにも、視野を広げて色々なところから考えられる人に自分はなりたいと思います。

優里は、決して社会科が得意な生徒ではない。しかし、前単元の学びにおいて、上記のように過去の出来事を自分事として捉えて未来へつなげていくという歴史の学びの深さを感じ始めているようであった。そこで、この歴史的分野の最終単元でどのような学びを歩んでいくのかを優里を中心として見取っていくことにした。

まずは、「満州から引き上げる国民」「闇市」「青空教室」などの資料をもとに戦後直後の日本の様子について調べていった。そして、物資や食料の不足、空襲による都市の壊滅など国全体や国民が困窮していることを全体で共有した。

そこで、ここまでの学びを振り返りながら戦後直後の日本の状況をネーミングしていくことにした。ネーミングとは短文で自分なりに表現する方法であり、これまでの単元でも実践してきた。短文で表現することで、そこに自分なりの思いを込めることができ、多様な表現が生まれるため子どもたちは、毎回真剣に考え、お互いのネーミング聞き合うことを楽しみにしている。

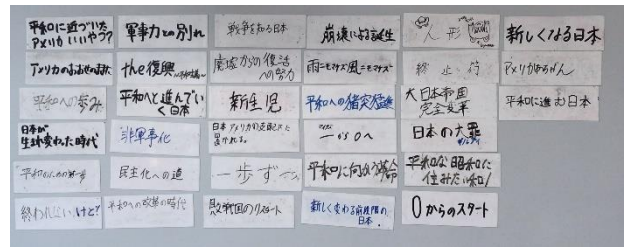


写真1 戦後直後の日本のネーミング

「0（ゼロ）からのスタート」「一歩ずつ」「廃墟からの復活への努力」など戦争の悲劇を乗り越えて新たな時代を創っていく時代であるとの認識が分かる。また、「平和に進む日本」「平和のための第一歩」「平和への改革の時代」など最も多くのネーミングに見られたキーワードは「平和」という言葉であった。優里も、「the 復興～平和主義～」というネーミングを付けた。前単元での学びをつなげ、平和な時代に向けての復興を期待する時代であるとの認識が強いようであった。

(2) 「戦後が終わる」の意味を考える

(第2時)

前時でのネーミングをもう一度確認しながら、「戦争が終結してから78年間で何が大きく変わったのか」と問いかけた。すると、子どもたちは。「高層ビルなど建物が増えた」「戦争をしなくなった」「食料不足がなくなった」など戦後直後からの変化を現代の社会と比較しながら答えていった。ここで教師は、「もはや戦後ではない」と板書をした。そして、「『もはや戦後ではない』と言われるような時期があるのだけれど、この言葉はどういう意味だろう」と問いかけた。

麻央：経済的に豊かになったってことかな。

大輝：もう戦争の時代は終わって、平和になったってことじゃないかな。

広大：でも、今も「戦後」じゃないかな。「戦後」って終わるもののなの？

佐奈：そもそも「戦後」って何だろう。

貴広：戦後直後とは違うってことかな。

子どもたちは、「戦後」という言葉が何を意味するのかに戸惑いながらも、前時で調べた戦後直後の日本の状態が変わったときであることではないかと考えていった。また、インターネットで「もはや戦後ではない」という言葉を検索し、すぐに1956年に発表された「経済白書」の中の一文であることをつかんだ生徒もいた。その生徒の調べたことを全体で共有すると、「経済白書」と

いう文書の名の通り、経済的な側面での復興を示す言葉として用いられたことであることが分かった。

そこで教師は、「『戦後』の終わりって経済的なことだけなのかな。日本がどのような状態になったら『戦後が終わった』と言えるのかな」と問いかけ、各班で議論していくことにした。

翔馬：やっぱり壊滅的な状態から、街が立て直されたときじゃないかな。復興が完了したときに「戦後」の終わりだと思う。

優里：私は「戦後が終わる＝成長が終わる」だと思う。だから、まだ街の復興が完了しただけでは「戦後」が終わったとは言えないかな。国民みんなが経済的な豊かさを感じて、それが一旦終わるときが「戦後」の終わりだと思う。

雄二：他の国との関係も重要だと思う。色んな国と戦争していたけれど、そういう国との関係が良くなった時じゃないかな。

理恵：そうだね。例えばアメリカとか。今は、日本とアメリカは仲が良いけど、なぜそうなっていったんだろう。

優里たち1班は、経済的な側面での議論の軸にしながらも、国際関係も「戦後」の終わりに大きく関係していると捉えていった。

各班がホワイトボードに考えを書き出していたところで、各班の考えた視点をそれぞれ短冊に書き、教室前面のホワイトボードに貼っていった。そして、それを眺めながら社会委員が中心となってカテゴリー分けをしながら、カテゴリー名をつけていった。

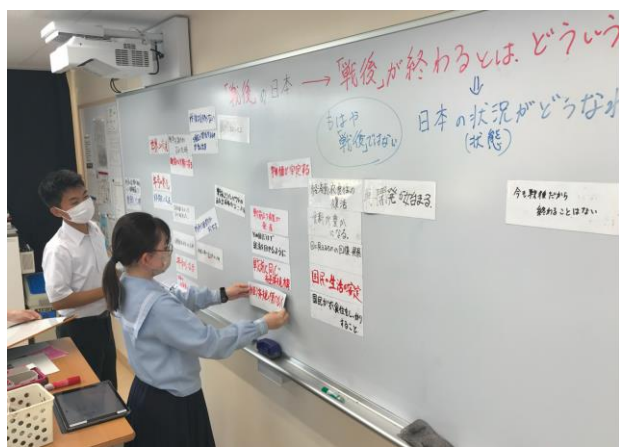


写真2 社会委員がカテゴリー分けをする

社会委員は、各班から出された短冊をカテゴリー分けしていくが、判断が難しいものもある。その都度、短冊を出した班に問いかけながら、分け

ていった。こうすることで、各班の意見を共有しながら、自分たちの班では出てこなかった視点に気づくことができる。優里たち1班では「国内の政治」に関する視点は全く出てこなかったが、他の班から「戦争中は国民の意見が政治に反映されなかったから、国民の声が国に届くようになることが『戦後』の終わりと言える」という考えを聞くことで国内政治の視点も大事だと認識しているようだった。

こうして、「復興」「経済」「国民生活」「国際関係」「非軍事化」「政治」の6つのカテゴリーに分けられた。更に、子どもたちから、「復興」と「経済」は「経済」としてまとめ、「政治」と「非軍事化」も「政治」としてまとめても良いのではないかという意見が出され、「政治」「経済」「国民生活」「外交」の4つの視点で「戦後」の終わりを考えていくことになった。

具体的には、「政治」は、「国民の届かなかった声が届くようになったら」「軍事開発の衰退」、「経済」は、「戦前よりも産業が発達したら」「好景気になったら」、「国民生活」は、「国民の衣食住が安定したら」「多くの国民が安定した生活をおくれるようになったら」、「外交」は、「世界の国との交流が盛んになったら」「戦争していた国と仲良くなったら」という状態が「戦後」終わりとするという考えをクラス全体で構築していった。

そこで教師は、「では、いつ戦後は終わったと言えるのだろうか」と問いかけ、1945年から2022年までの日本と世界の主な出来事をまとめた年表を配布し、予想していくことにした。そして、各自の予想した時期に、自分のネームプレートを貼り、全体で眺めていった。

最も多くの子どもたちが予想したのは、1950年から1955年であった。この時期はサンフランシスコ平和条約で日本の独立が承認され、朝鮮戦争による特需景気が起こり、高度経済成長が始まった時期である。一方で1960年から1965年の時期ではないかと考えている子どもたちも4人いた。理由を聞くと、「国民所得倍增計画という言葉にインパクトがあるし、東京オリンピック開催もすごいことだから」という意見であった。また、優里ら5人の子どもたちは、1970年から1975年の時期にネームプレートを貼っていた。その理由について、優里は、次のように振り返りシートに綴っている。

優里の予想

私は、「戦後が終わる＝成長が終わる」と考えているので、高度経済成長が終わる1973年ぐらい

だと予想した。でも、そもそもこの考えがどうなのかわからないから、これから調べていく中で改めて考えていきたい。

このように優里をはじめ多くの子どもたちは、何となく年表の出来事をもとに考えてはいるが、確固たる自信はないようであった。それは、戦後の出来事についての知識がまだ乏しいからである。しかし、あえてここで知識が乏しいままの状態ですべてを予想していくことで、この後の調査活動への必然性を生み出していきたいと考えた。

(3) 戦後の歩みを協働で構築する

(第3～5時)

「いつ戦後は終わったのか」という探究していく主題を確認し、前時に配布した年表の出来事を詳しく調査していくことにした。4人班で約32個の出来事を分担して調査していく。どのように分担するかは各班に任せた。優里たち1班は、年代の古い順に1人約8個の出来事を割り振って調査していくことになった。そして、調査した内容を調査カードに書き込んでいった。調査するにあたり、自然と教科書や資料集などを開いていく。また、自分が調べた出来事は後ほど班のメンバーに説明しなければならないため、単に記述されていることを丸写しするのではなく、自分なりにまとめていくことが必要になる。そして、自分の調査した項目が前時で共有した4つの視点のどれに関わるかも調査カードに書いていく。これによって、出来事と「戦後が終わる」こととの関連性も考えていくことになる。

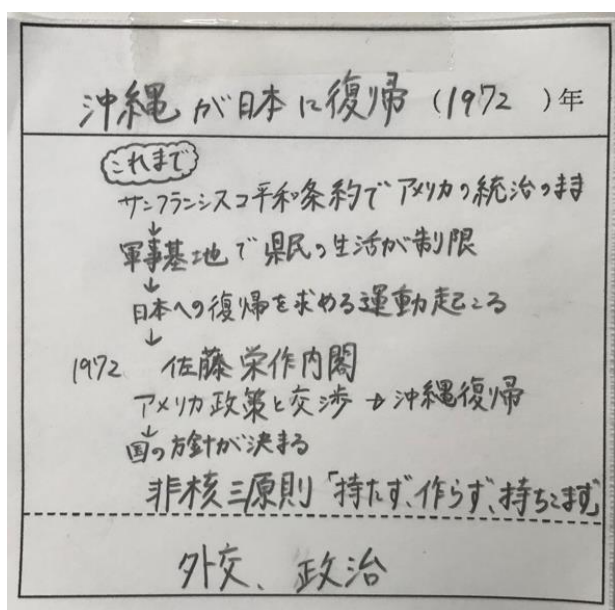


写真3 調査カード

各自が調べてきた調査カードを班の中で説明しながら、大型のホワイトボード(生徒机4つ分)に戦後の歩みが分かるようにしてまとめていくことになった。その際には、補足資料として教科書や資料集などを提示しながら説明していくようにした。



写真4 調査カードを貼りながら説明していく

翔馬：朝鮮戦争が起こったことで、日本はアメリカ軍向けに大量の軍需物資を生産することになった。輸出が増えたことで日本の経済が好況になったから、特需景気とつながるんじゃないかな。

優里：日ソ共同宣言によって、ソ連との国交が回復したから日本の国連加盟につながったよね。

雄二：高度経済成長が終わったのも、石油危機があったからだし、その石油危機も第四次中東戦争が起こったことが影響しているよね。

優里たち1班は、互いに説明を聞く中で、自分の調査した出来事が班のメンバーが調査した出来事と深いつながりがあることを見だしていった。教師はその内容をホワイトボードに書き込むように促していった



写真5 出来事同士のつながりを書き込む

(4) 「いつ戦後は終わったのか」を考察する (第6～7時)

出来事同士のつながりを見だし、戦後の歩みを分析していった子どもたちは、いよいよ「いつ戦後は終わったのか」について議論していった。

しかし、1班の議論を聞いている中で教師は困ったことになったと心の中で唸るようになった。

翔馬：なんか1つの年に決めるってかなり無理があるよね。4つの視点それぞれの「終わり」があるような気がする。

優里：じゃあ4つの視点それぞれで考えてみようか。「外交」はやっぱり1956年かな。国連加盟が日本の国際社会の復帰になったと思うし。「経済」は？

雄二：1951年ごろの特需景気か、1955年ごろからの高度経済成長かな。経済成長の規模の大きさという意味ではやはり高度経済成長かな。

理恵：そうだね。ということは、高度経済成長期に「三種の神器」など国民の生活が豊かになっていったから、「国民生活」も同じ時期かも。

翔馬：「政治」は難しいね。「軍事開発の衰退」っていう見方では「自衛隊の創設」って微妙だよね。となると、「非核三原則」が大事になのかな。そうすると1960年代後半？

教師は、子どもたちが総合的に「いつ」を議論して考えていくと考えていた。しかし、1班だけでなく多くの班は、4つの視点それぞれの「終わり」を考えていった。確かに、4つの視点を考えていくうえで、同時にこの時期に終わった状態になると判断するのは困難である。だからこそ彼らは、4つの視点それぞれの「終わり」を議論していったのであろう。また、4つの視点のどれを重視するかは個人の考えによって異なり、4つの視点がすべて並列的な重要性を持つわけではないと考えた。

そこで教師は、クラス全体での議論をするにあたり「『いつ』を総合的に判断しても良いし、4つの視点の中で自分が特に重視したい視点を取り上げて判断しても良い」と全体に伝えた。子どもたちは、その考えが腑に落ちたようで、それぞれで自分なりの「いつ」を判断していった。

優里は、この時の自分の判断について、振り返りシートに次のように綴っている。

優里の判断

私は、4つの視点には重視すべき順位があると思っていて、特に「外交」と「国民生活」を重視している。「外交」は、前の単元で日本の国連脱退が戦争に向かう大きな要因になっていたの、それが変化した

1956年。そして、「国民生活」は戦争で被害を受けた国民の生活が豊かになることが戦後の終わりとして大事だと思うから高度経済成長の時期。つまり、1956年です。

この時の振り返りシートでは、優里のように、4つの視点の中で特に重視するものを軸に判断していったり、総合的に判断していったりする子どもたちが多く見られた。

そして、第2時と同じように、教室前面のホワイトボードに自分のネームプレートを貼り、「いつ戦後は終わったのか」についての自分の判断を表出していった。

「1950年から52年」が3人。1956年が16人、1964年が4人、1972年が9人と、大きく4つの年に判断が分かれた。

ここでは、社会委員の卓志と穂南が議論をコーディネートしていった。



写真6 社会委員が議論をコーディネートする

社会委員の卓志は、年代の古い順にまず意見を聞いていくことにした。

光汰：1950年～52年だと思います。「外交」面ではサンフランシスコ平和条約で日本の占領状態が終わり、特需景気によって「経済」が戦前の状態に戻ったから。戦後直後の状態から脱却したのがこのころだと思うからです。

雄二：1956年だと思います。「外交」では、やはり国連加盟が出来事として大きく、サンフランシスコ平和条約は西側諸国だけだったけれど、ソ連など東側の国々にも認められたことが大事です。また高度経済成長によって戦前よりも経済発展したことで「経済」の面や「国民生活」の面が豊かになった。そして、55年体制によって「政治」も安定するようになったので、4つの視点を総合的に考えるとこの年です。

雄二ら 1956 年の意見は 1950 年～52 年には欠けていた部分を補完し、4 つの視点を包括するポイントを押さえており、非の打ちどころのないものようであった。しかし、次に意見を述べた 1964 年とする陽介たちの考えで空気が変わった。

陽介：東京オリンピックがあった 1964 年だと思います。オリンピックを開催するとはどういうことかと考えました。政治的に安定し、経済も豊かでないで開催できません。そして、国民がスポーツを楽しめる状況にあること。つまり平和の象徴なんです。そして、開催できたということは「他国から政治的にも経済的にも認められた」ということです。「他国に認められる」という視点が重要です。

この「他国に認められる」という視点は、4 つのどの視点とも関わることでありながらも、世界的な視野からの「戦後の終わり」を考えさせられるものであった。この意見には、1956 年だと考えていた子どもたちも自分にはなかった視点であったようでざわついていた。

そして、次の 1972 年だとする意見で更にクラス全体がざわついていく。

優希：沖縄返還が成し遂げられた 1972 年だと思います。今までの意見で「国民」ということが出てきたけれど、沖縄の人たちも大事な国民だと考えます。沖縄も日本です。沖縄が返還されてこそ戦後の終わりです。また、同じ年に日中共同声明が出され中国との国交が樹立しました。そう考えると、「外交」の面で見ても 1972 年が戦後の終わりです。

この「沖縄が返還されてこそ戦後の終わり」「中国との国交樹立」という意見には、納得する子どもたちも多かった。

一方で、「それを言ったら、ソ連とは平和条約がまだ結ばれていないし、まだ戦後は終わっていないことになる」という意見や「戦後の壊滅的な状態が終わったことを『戦後の終わり』と捉えるならば 1972 年は遅すぎる」という意見も出され、議論が紛糾した。子どもたちは、議論を通して、改めて「戦後とは何か」を考え直しているようであった。

この議論を通しての優里の振り返りシートには、次のように綴られている。

優里の振り返り

私は、みんなの言っていることが納得いきすぎて逆に頭が混乱した。特に 1972 年だとする意見。確かに「外交」の視点で納得。でも「戦後の終わり」とするのは、ちょっと遅い気がするけれど。

優里自身は 1956 年だとしていたが、1972 年の子どもたちの意見に考えを揺さぶられていた。しかし、意見には納得するけれども何か腑に落ちないようであった。

教師は、振り返りシートを読んでいると、優里と同じ 1 班の雄二の内容に目が留まった。それは次のような内容である。

雄二の振り返り

みんなの意見を聞いていると、どこかで完璧に戦後が終わったのではなく、1956 年ぐらいで第一次的な戦後の終わりがあったという気がする。

この「第一次的な戦後の終わり」という内容が気に入り、次の時間の最初に雄二に詳しく説明してもらうことにした。

(5) 戦後が終わる「ステージ」の変化を探る (第 7～8 時)

雄二：上手く言えないのですが、おそらく戦後の終わりには段階があって、徐々に戦後が終わっていくというイメージなんです。ステージが変わるというか。

この「ステージが変わる」という意見は、優里をはじめとした多くの子どもたちに共感された。そこで教師は、改めて戦後のホワイトボードを見直しながら、戦後のステージの変化にネーミングをつけていくことを提案した。



写真 7 戦後の変化にネーミングをしていく

ステージの区切りをどこにするかは、各班に委ねることにした。そして、その区切った時期が日本にとってどういう状況であったかを中心に議論しながらネーミングしていった。

翔馬：最初のステージは、1945年から1951年までかな。国内の政治が整い始めて、占領も終わった。

「はじめての第一歩」ってどう？

優里：次は1956年までかな。ソ連と国交を樹立して、国連に加盟できた。世界の国々を仲直りして国際的な地位が向上した時期。「仲直り」にしよう。

雄二：1956年以降は、高度経済成長もあって、国力が増加していった感じがする。所得倍増計画もこのころだしね。平和な日本に向かっていくから「平和への直進」？

優里：1964年の東京オリンピックでは、いろんな国に認めもらったという証拠だね。あとは、GNPが世界第2位になるなど、経済的にも大きく発展した。戦争で敗戦国になった日本が世界の中で地位を確立していったということかな。「敗者復活」という感じ。

理恵：1972年以降はどうなんだろう。戦争には参加していなくて平和なんだろうけど。石油危機やバブル崩壊など良いことばかりじゃないよね。今もいろんな課題が残っているし。蛇行しているイメージ。

翔馬：じゃあ「蛇道」ってどう？

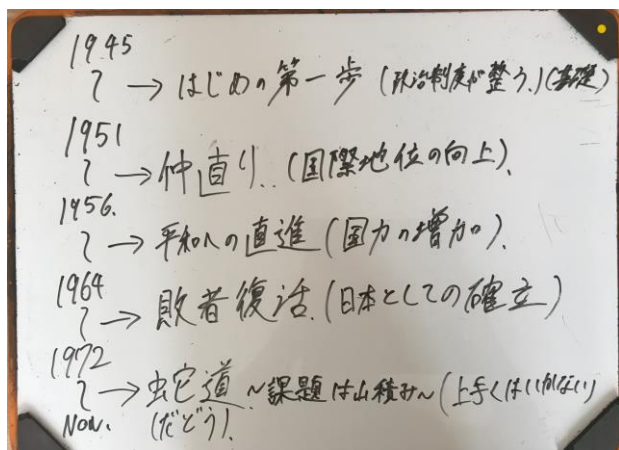


写真8 1班のホワイトボード（日本の戦後）

このように、各班でもう一度、戦後のホワイトボードを眺めながらどのように戦後が変化していったのかをネーミングしながら議論していった。そこでは、これまでの戦後の終わりを考える4つの視点も大切にしながら議論していった。

すると、「世界の戦後」も考えてみたいという意見があった。日本と比較しながら世界の戦後の変化にもネーミングをつけていった。

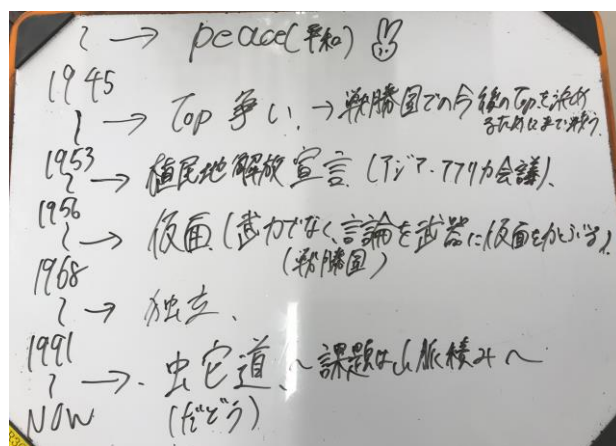


写真9 1班のホワイトボード（世界の戦後）

優里ら1班の議論では、戦後の世界を考えると、国際連合により平和に向けての歩みはあるものの、冷戦とその影響下での各地での戦争があり、日本と比べ戦争のない平和な戦後とは程遠い状況にあることを指摘していた。また、現代を日本と同じく「蛇道」とネーミングし、世界はロシア・ウクライナ問題をはじめとする予断を許さない状況にあることを認識していった。

このように、日本と世界の戦後を大観し、最後に「いつ戦後は終わったのか」について、戦後の日本と世界の状況をもとに最終レポートを書き、本単元を終えた。

3. 省察

多様な視点で捉えることで学びが深まる

本実践では、「いつ『戦後』は終わったのか」を主題としていったが、「戦後が終わるとはどういう状態なのか」「そもそも『戦後』とは何か」という疑問を子どもたちが抱くようにデザインすることで、多様な視点を生み出していった。この多様な視点と、それに基づく多様な判断があるからこそ、考える必然性が生まれ、探究する意欲が継続していったと考えられる。

優里は最終レポートの中で、自らの学びの変容について次のように記述している。

私は、「いつ戦後は終わったのか」について、最初は、「戦後が終わる＝成長が終わる」という捉え方をしていましたが、最終的には、「戦後が終わる＝成長が始まる」というふうに捉えるようになりました。そして、成長とは経済的なものだけではないと思うようになりました。前の単元で、国民を巻き込み外国とひどく対立した戦争を日本は経験したことを学び、「外交」と「国民生活」の2つの視点が特に重要だと考えます。その視点から、「はじめての第一歩」と「仲直り」が終わり、日本の成長が始ま

った 1956 年が「戦後の終わり」だと考えました。日本がこうして平和で豊かな国になったのは、戦後のこの時代があったからだと思うので、この時代を学ぶ意味をすごく感じました。今後学習する公民の授業もこの単元で学んだこととつなぎ合わせて考えていきたいと思います。

優理が「成長とは経済的なものだけではない」と記述しているように、多様な視点で戦後を捉えることを通して、自らの学びを深めていったことがわかる。それは、他者の意見を自分の考えと照らし合わせながら、時には考えを揺さぶられながら構築していったものである。

また、戦後におけるステージの変化を自ら省察する中で捉え直し、自説を再構築していることから、多様な視点で物事を考えることの意義を感じていることがわかる。

共に学ぶプロセスをデザインする

「いつ『戦後』は終わったのか」という価値判断は、多様な判断が想定されるため決めるのが困難であったようである。教師は、総合的に判断するものと思っていたが、子どもたちは自ら協働で考えた4つの視点を大切に、一つ一つを丁寧に吟味していった。この主題には正解がない。だからこそ、何を根拠にそう考えるのかを明確にしていくことがより重要である。しかしながら、どの判断にも納得できる根拠があったため、クラスでの議論の場面では、何か腑に落ちないものがあったのだろう。

そこで、雄二から発せられた「戦後のステージが変わる」という意見は、クラス全体にとって学びの価値を繰り上げることに繋がったと考える。実は、教師はクラスでの議論を終えて、自分なりに考えを構築することでこの単元を終結しようと考えていた。しかし、雄二の意見を拾い上げ、クラス全体に投げかけることで更なる学びの深まりを生み出そうとした。

教師の一方的な単元デザインではなく、子どもと共に学ぶというプロセスをデザインすることで、教師の想定以上の学びの深さに繋がっていく。学びの主体は子どもたちにあることを改めて感じた。